



若い力で地域課題に挑戦！ ～『地域Ⅱ』学習発表会～

1月21日(金)、3年生の地域コースによる学校設定科目『地域Ⅱ』の学習発表会が行われました。いま、立科町をはじめ全国の地方行政の直面している課題、それは人口減対策です。町の将来は、どのように町の魅力をつくり、それを発信し、定住者を増やすかにかかっているといても過言ではありません。そこで今年度は連携協定を結んでいる長野大学と、立科町の企画課に全面的にお世話になりました。生徒は、長野大学副学長の山浦和彦教授と町の地域おこし協力隊で移住定住担当の永田賢一郎さんのご指導のもと、「立科町への移住者を増やすためのアイデア」を準備し、右のテーマでプレゼンテーションを行いました(裏面に新聞記事)。

ご当地アイドルをつくって売り出し、立科町をオタクの聖地に！ 長和町と特産をコラボして魅力をアップ。 町のかたちの「くびれ」を生かしインパクトを発信。 先進町村にならった子育て支援策を。 ショートアニメで町を売り出せ！ 観光地の山エリアに対し、大きな店舗を誘致し里エリアの活性化を！ など、大人が思いもつかない高校生のアイデアがプレゼンを通して発せられました。中には町のPR要員にしたいほど口達者な生徒も。

また、監修をしてくださった山浦先生からは、とても良い講評をいただきました。今まで1年間、ご指導をいただきました先生方に、心より感謝申し上げます。



発表順	テーマ
1	立科ご当地アイドルをつくる
2	長和町との連携～特産づくりを中心に
3	立科町のインパクトを大きく！ ～若者が検索する町へ
4	空き家でシェアオフィス
5	飲食店開店希望者向けキャンペーン
6	子育て世帯向けの支援策
7	アニメによる知名度アップ
8	空き家バンク登録数を増やす方法
9	子育て世帯・就農希望者向けの支援策
10	住民向けのまちづくり～里エリアの充実



大人顔負けのトークにびっくり



山浦先生から講評をいただく



指導者 永田賢一郎さんを囲んで

やったあ！全員合格「介護職員初任者研修」

～福祉コース3年の快挙～

福祉コース3年生は、コースの仕上げともいえるべき「介護職員初任者研修(旧ヘルパー2級)」の資格に全員が挑戦し、全員が合格という好成績を残しました。2年前までコース全員が受験しなかった現状でしたが、昨年に続く快挙でした。福祉コースの生徒で将来介護職に就く生徒は実は少数です。しかし、コミュニケーションをとり相手のことを思いやり行動することは、どの職業でも社会人必須の能力です。「自分は関係ないからいいや。」ではなく、今ある目標にみんなでチャレンジし、ともに合格し喜びを分かち合う経験は、必ずや将来の本人にとって大きな財産になります。ご指導いただきました石井先生と水間先生、そしてコロナ低減期の間隙をぬって実習を受け入れてくださった「ハートフルケアたてしな」の皆様、講義をしてくださった依田窪病院の山崎先生と桜井先生、誠にありがとうございました。



真剣そのもの実技試験

困ったお話(その57) (ごめんなさい。50年後の告白。)

コロナ禍が追い風になって、近年はキャンプブームなのだそう。キャンプと聞くと思い出するのが小学生の時、学校の遠足でキャンプ場に行き飯ごう炊きをしたことだ。

各々がお米と材料を持ち寄り、各班ごとにカレーを作るようになっていた。しかし当日、同じ班の班長である女子が欠席してしまい、私は満場の疑念を背景に臨時班長に就任した。

料理に無知な私は、さっそく野菜の切り方や水の分量などデタラメに指示を出した。最初からそれに気づいていた班員は一枚上手で、銘々勝手に作業をする見事なチームワークだった。その結果困ったことに。なんと鍋にはサラサラのカレースープができあがっていた。班員の非難の目が集中するのを感じながら、私は忘れていたことに気がついた。

「そうだ、友達経由で班長のお母さんから託された紙袋があったんだ。」

紙袋を開けてみると、中には白い粉が。「これは、とろみを出すための片栗粉だ。」母親がやっていたことを思い出した私は、起死回生のチャンスとばかりにその粉を鍋にドボドボ入れた。カレーが水っぽくなることを予想して私に託したなんて、何てすごい班長だろう。

ところが全部入れてもちっともとろみが見つからない。仕方がないのでご飯にかけて食べると、噛むたびに「ジャリ、ジャリ」とする。まずいなんてもんじゃない。

翌週、学校に来た班長に訊いてみると、こう言われた。

『えっ！ 食べたのばかあ～!! あれは鍋底を洗うための磨き砂(クレンザー)よ!!』

あれ以来、バカに磨きがかかった。



2022. 1月25日(火)信濃毎日新聞 東信版 第20面

立科移住 どう増やす

【移住のトビラ】

町の魅力・課題学ぶ蓼科高校生 職員に提案

本年度は両コースの3年生全27人が「地域Ⅱ」の授業で、立科町の永田賢一郎さん(38)に、町内で空き家が増えている現状や移住についての知識を教わった。移住者から話を聞いた、空き家の片付けを体験したりもした。

昨年12月上旬、長野大上田市 社会福祉部の山浦和彦教授(66)を招き、27人が1人ずつアイデアをスライドで中間発表。山浦教授から助言を受けて内容を直し、同校教員を前に改めて発表。今月21日に最終発表する生徒10人(当日1人が欠席を決めた。小学生の時に千葉市から立科町に家族と移住した佐藤草汰さん(18)は、10年間過したと感じたことを提案に盛り込

町の「シンボル」が必要

ご当地アニメを作ろう

【蓼科高校3年生の提案】※発表タイトルから

- 立科ご当地アイドルをつくる 植竹慎吾さん
- 長和町との連携～特産品づくりを中心に 春原零さん
- 立科町のインパクトを大きく！～若者が検索する町へ 山下瑠海さん
- 空き家でシェアオフィス 磯部未宇さん
- 飲食店開店希望者向けキャンペーン 山田玖悟さん
- 子育て世帯向けの支援策 井出尚輝さん
- アニメによる知名度アップ 宮坂颯さん
- 空き家バンク登録数を増やす方法 柳沢宏さん
- 子育て世帯・就農希望者向けの支援策 木内友稀さん
- 住民向けのまちづくり～里エリアの充実 佐藤草汰さん

んだ。「町の移住のサポートは充実しているが、若い人が楽しめる場所が少ない」と指摘。「町内に飲食店やカフェなどの遊べる場所を作り、若い人がもっと楽しめるような町づくりが必要」と話した。山下瑠海さん(18)は「立科町ならではの個性を持った「インパクトのあるシンボル」を作る案を発表。町の細長く特徴的な形を生かしたキャラクターを作るアイデアを紹介した。授業を通し、町のことに詳しくなることができた」と振り返った。最終発表を聞いた山浦教授は「若い人ならではのアイデアが詰まっていた。みんなで一緒に町のことを考えられた素晴らしい機会だった」と話した。